特集 インタビュー

住民の底力でまちを変える

ご近所づきあいが希薄になってきている昨今ですが、
さまざまな出来事が起きている今、人と人とのつながりの
大切さを改めて実感している方も多いのではないでしょうか。
そこで、地域の問題を解決する「地域力」を高めるために必要なことは何なのか、
埼玉応援団の一員でもあり、テレビやラジオ番組でご活躍のキャスター
堀尾正明さんにお話を伺いました。

—堀尾さんは埼玉で学生時代を過ごされたと伺っています。

小学校6年生の2学期に埼玉に引っ越してきたんです。大宮南小学校だったんですよ。大宮南中学校、浦和高校と進んで、早稲田大学に行きました。その当時は埼京線がなくて、赤羽線というのがあったんですが、通学時、赤羽から池袋までの満員電車の10分間が本当につらくてね…。それがきつくて都内に下宿したんです。

—今ではお仕事で埼玉を訪れる機会が多いようですが、埼玉の地域性に変化を感じますか。

もう全然違いますよ！　まず新幹線が通ってなかった。そして新都心がなかった。当時あの周辺には工場があって、一帯は操車場でしたからね。大宮駅は東口にはいくつもデパートがありましたが、西口は古い商店街があるだけでまったく開けてなくて。今や西口も栄えて、大きく変わりましたね。

また、昔に比べ今はPR力が出て、埼玉の知名度もずいぶん上がってきたように思います。これからもPRの仕方によって変わってくるんじゃないでしょうか。

—堀尾さんが以前出演されていたNHKの番組「難問解決！ご近所の底力」はスタジオで住民の方々と地域の生活問題について直接ディスカッションし合う内容でしたが、中でも印象に残っている取り組みがあれば教えてください。

今回の東日本大震災を例に考えると、一人暮らしのお年寄りの避難方法について日頃から話し合われているかいないかが、〝命を守れるかどうか〟に関わってくるんです。

ある事例として、地元の中・高校生などが5人位の班を作って、どの班がどのお年寄りを助けるかを決めてシステム化した避難訓練をしている地域がありました。自分の身の安全を確保した上で、お年寄りを援助しに行くという仕組みです。それって普段から相手のことをよく知っていないと、いざというときに役に立たないんですよ。日頃からのこうした取り組みは世代間交流にもつながるんですね。

他には、主婦3人が連携して一人暮らしのお年寄りが無事に暮らしているか遠くから見守るという取り組みもありました。洗濯物が取り込まれているか、電気メーターが動いているか、新聞や郵便物がたまっていないか、状況をさりげなく見守ることで孤独死をなくしていこうという、これも自主的に考えて始められた取り組みです。

—一方で、何からどう取り組めばよいかわからない住民の方が多いことも現状かもしれません。

まずは、普段からのコミュニケーションが大事です。子どもの犯罪に関することでは、通学時間帯に通学路周辺の大人が外に出て見守るという活動がありました。その時間になると外に出て花の水やりをしたり体操をしたりして子どもたちに声掛けをするというものです。そういう地域は犯罪者も避けますよ。古きよき日本のマインドに戻そうという動きですね。

—昔では普通に見られた光景なんですね。

現代は町づくりの中でも個人情報保護とか言われているし、インターネットが普及して情報化社会になったことで、さらに人と話をしなくなった。小さい頃から一人でいることに慣れている世代は、家庭内でも会話がなくなってきているんですよね。

—家庭でも会話が少なくなってきているということは、地域でのつながりを持つことはもっと難しいですね。

でも例えば引きこもりの若者たちに、「地域の子どもたちに勉強を教えてやってよ」という取り組みをしているところもありますよ。自分の力を地域の中で活かすということですよね。地域が、家庭・学校・会社からスポイルされている人たちの受け皿になっているんです。

—これらの取り組みを実際に見聞きされてきて、堀尾さん自身に何か変化はありましたか。

テレビって実際に世の中の変化を手助けすることができるんだと思いました。新しい番組の可能性を感じたことが自分の中での変化ですね。

番組がムーブメントを起こしたんです。例えば、空き巣に悩んでいる地域の方は、この番組に出て大変有名になりました。空き巣防止の取り組みで徹底的にパトロールを始めてから、コミュニケーションが少なかった町に新たにサークルが生まれたり、子ども会やお祭りが復活したり…さらには若者がその地域に引っ越してきたりして、とっても生き生きとした町に生まれ変わったんです。地域社会の防犯活動推進に対して表彰もされ、今や外国から日本的な地域の守り方を学ぶために見学者が来るほどですよ。

—今日お聞きしたお話を、住民参加の地域づくりのヒントにしていけたらと思います。

埼玉は人口が多いし県外から入ってくる人も多いので、少子高齢化の実感は薄いかもしれないけど、少子高齢化に向けてのさらなる対策を取っておいてほしいですね。

そして住民活動で重要なことは、この町を本気で変えたいというリーダーの存在です。プロジェクトが成功しているかどうかは、情熱を持って活動を継続し模索しているリーダーがいるかどうかです。何があってもブレない意識で取り組むリーダーがいると、地域が変わり、町が変わります。

堀尾　正明

フリーキャスター。日本体育大学客員教授。
昭和30年生まれ。早稲田大学第一文学部哲学科卒業。昭和56年NHKにアナウンサーとして入局。「スタジオパークからこんにちは」「難問解決！ご近所の底力」などに出演。平成20年3月にNHK退職。現在はフリーキャスターとしてTBS「Nスタ」、日本テレビ「誰だって波瀾爆笑」、TBSラジオ「土曜朝イチエンタ。堀尾正明＋PLUS！」など様々な番組で活躍している。